

氏名	岩谷 晃太
ヨミガナ	イワタニ コウタ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第664号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 錆と劣化の形象化－表層の破壊－ 〈作品〉 線と軌道、跡、線 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	吉村 誠司
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	高島 圭史
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	宮北 千織
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）

（論文内容の要旨）

錆とは、金属の表面の原子が酸素や水分によって腐食することで、酸化物あるいは水酸化物が生じる化学的な現象である。しかし、その現象を見る私には、錆や腐食という劣化は物質本来の姿からまるで新たな形を与えているように見え、時に美的感覚や想像の余地を与えてくれる。それは錆という劣化が、物体に偶然による形象を与えてくれていると言い換えることができる。本論文では、私の創作活動に大きな影響を与えている物質の表面に発生する錆や劣化を、絵画表現に転化させる過程を導き出し、ダメージがもたらす表現を取り入れ、新たな絵画を生み出そうとしている自身の絵画制作について論述するものである。本来、絵画において剥落や傷などの破損は作品の質を落とすものであり、避けるべきダメージであると言える。しかし私は無意識のうちに古い絵画や美術作品にできた偶然の破損、また古びた市中の道路や建造物などの劣化の中に破壊が作り出す現象の美しさを感じていた。そのような美意識は一体どこから生まれたのだろうか。骨董品の持つ魅力の一つとして、完成された新品では出すことのできない、前の持ち主の残した痕跡や、経年劣化によって偶然生まれたダメージの図像に感じる美しさが挙げられる。また、欠けた部分を金継ぎしてできた陶器などは、人が意図して破損というダメージを利用し、作品の魅力の一部を変化させた美意識の現れである。他にも、皮革製品において美しいとされるエイジングと呼ばれる経年変化や、あえて化学製品で色を退色させるケミカルウォッシュや石と一緒に洗濯し傷を付けて作られるストーンウォッシュのダメージジーンズなど、人が古い物や傷などの持つ特有の美しさに惹かれる感性を持っていることを示す例には枚挙に暇がない。それらの美意識は私の作品制作にも大きな影響を与えている。

本論文は3章で構成される。以下に本論の章立てを述べる。

第1章「錆と劣化への憧憬」では、自らの絵画制作を遡及した結果、切り離すことのできない幼少時からの生活環境の中で発生した原風景の記憶と錆と劣化への憧憬、およびその経緯について述べる。私の育った東京の下町では統一した建築様式がなく、特に戦災を逃れた地域では戦前、戦後の建物が混在していた。耐久年数を超えた建物の外壁などは、金属が酸化し表層が破壊され下層の色彩を露出させるという錆の

現象が身近な環境にあり、それらを見て感じていた破壊された物体への本能的な美意識の芽生えについて言及する。

第2章「絵画表現への利用」では、絵画や美術作品の経年劣化と、それに対して作者自身が自らの絵を絵画表現の一部として恣意的に破壊する行為について実例を挙げながら見解を述べる。アプローチの異なる二つの種類の破壊と、共通の美意識の所在を探る。また、いつから人は作品の質を落とすダメージを魅力ある表現の一部ととらえ始めたのかについて考察する。

第3章では、博士審査展への提出作品及び自作品のモチーフとして多く登場する線路や電線、人工物の持つ意味について明示する。非対称、非直線こそが自然の定理であるならば、線と線とが結びつき互いに交差しながら作られる線路は、人間の営みから発生した構造の象徴である。なおかつ風雨によって金属の錆という劣化の要素を含んだ姿は私がモチーフに求めていた景色なのである。過去の美術史の中で描かれた線路や人工物、その作家の意図などの実例を交えながら自作品について解説する。

終章では、本論文のまとめと今後の展望について述べる。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、錆(さび)や劣化に独特の共感と美意識をもつ筆者が、みずからの日本画にそれを表現として転化、昇華しようとする試みを論じた創作論である。

東京築地に生まれ育った筆者には、隅田川の匂いと、川風や河口近くの潮風で錆びたトタン貼りの家々が連なる風景が、原風景となっている。金属表面に時に抽象絵画のような景色を生む錆を、絵画表現として昇華すること。そしてもう一つ、都市景観を形づくる ”直線 ”

をとり入れることが、筆者の制作の二本柱となっており、両者が結合した錆びた「線路」の風景が、提出作品「線と軌道」につながっている。

第1章「錆と劣化への憧憬」では、都会に育った筆者の原風景にある錆と直線の記憶が、トタンと線路に集約されていることを述べる。また金属の錆の現象は、人工的につくられた金属(鉄、銅、錫など)が、酸化還元反応で自然に還っていく現象であること。絵具の顔料も、たとえば「弁柄」は酸化鉄、「緑青」は銅から生まれた錆であり、錆びと絵画は親和性が高いことを述べる。いわば彼にとっては錆が、彼の原風景と絵画制作をつなぎ、都市の自然回帰を象徴する存在であることがわかる。

第2章「絵画表現への利用」では、まず破損や経年劣化が時に美術作品に独特の美を生むことを、ミロのヴィーナスや、筆者自身が現状模写を行なった伴大納言絵巻、ヒビをそのまま景色として残した「柴庵」「破袋」などの陶芸作品を例に解説する。そこから、古色を演出した保存修復での錆漆や、未来の廃墟を想わせるダニエル・アーシャムの仮想考古学ともいうべき作品に言及し、自作では堅牢な下地の上に塗り重ねた絵具の層を、ヤスリやナイフで削って下層の重層化した色彩を露出させる技法をとっていることを説明する。そのイメージは、まさにトタンの錆の様子に近い。

第3章「提出作品「線と軌道」解説」では、現在の都市をつくりあげた産業革命の象徴である鉄道の線路をモチーフに、錆による劣化を演出した提出作品について解説する。上空からの俯瞰構図に、雲や所々に金属箔を配した古典絵画のような景観は、どこか来迎図を想わせ、都市文明の自然回帰のような物語性を醸し出している。

比較事例の選択や解説が的確なため、論旨は明快で文章も読みやすい。筆者の原風景は、大都市東京の中でレトロな環境が残る下町の風景だが、トタン貼りの家々はそのもと関東大震災後に防火対策として生まれ、第2次大戦の空襲も生きのびた建築である。しかしそれが経年による錆でおおわれていく光景は、都市の生態循環のようであり、またそれが都市に育った筆者の自然観でもある様子が窺われる。学位論文にふさわしい好論として、審査員一同の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

岩谷は博士課程において、人工物とその経年変化をモチーフとし、一貫した制作と研究を行ってきた。モチーフの原点は、岩谷が生まれ育った東京下町でよく目にしていたというトタン板の錆や腐食、塗装のはがれや汚れといった劣化の事象にあるという。制作と研究を進める中で、そのような劣化が発生する過程や環境、歴史的背景に関する知見を得て、岩谷自身の原風景や制作動機の根源をより深く認識したようだ。

加えて、岩谷は修士課程における「国宝伴大納言絵巻」の現状模写制作で、原本の紙のしわや変色、虫食いなどによる欠損、絵具の剥落や退色といった経年変化の事象を丹念に観察し、再現した。その際に獲得した技法材料の知識と経験が、博士課程における制作と研究の技術的な裏付けになっている。

提出作品「線と軌道」は、都市部の鉄道線路をモチーフとした作品である。鉄道線路を俯瞰した視点から描き、周囲の架線や建造物を効果的に配置することで、線路の直線的な形態を鮮明に浮き上がらせた。

しかし、いわゆる線路のある風景を描こうとして構想されたものではない。線路は、岩谷の故郷、人工物の集合体としての都市、自然界にはない形態である直線を代表するモチーフとして選ばれた。実際の風景の中の線路に、岩谷自身の記憶や知識にある様々な経年変化の表情を加え、線路が岩谷の原風景の象徴として機能するように造形されている。

制作方法にも意図がある。技法の面では、絵具の塗り重ねや盛り上げ、削り出しや洗い流しを繰り返し、材料の面では、硫黄と反応させた銀箔や真鍮箔を使用することで、経年変化を模した絵肌や色調を大胆に作りだした。

上記のように、提出作品「線と軌道」は表現内容と造形のねらい、制作方法の意図が明確であり、縦180×横450cmの作品サイズも相まって、空間的な広がりや時間的な奥行きを感じさせる迫力のある作品となった。

また、岩谷は提出作品「線と軌道」と共に博士展で展示発表した作品「跡」や「線」の他、博士課程で制作した作品群において、金属箔の硫化に関する実験と絵具の積層と剥離に関する実験を徹底して行った。自身の目指す表現のために努力を惜しまない姿勢が見られた。

岩谷の制作と研究は、日本画画材の特徴を経年変化の事象を引き合いに出しながら捉え直すという、可能性を感じさせる試みでもあった。その試みは提出作品「線と軌道」において実験段階を経て次の段階へ進んだ。日本画の表現や技法についての新たな発想を創出するためにも、今後の継続した制作と研究が期待される。

以上の点から、提出作品「線と軌道」は審査会において学位にふさわしい優秀な作品であると評価され、審査員全員一致で合格とした。

(総合審査結果の要旨)

岩谷君は学部卒業制作から一貫して錆色にこだわってきた。錆色に魅かれ、古い物への愛着と、彼独自のものの見方を追求することにより生み出された色彩が、個性になって来ている。茶系の色彩絵画は数多あるが、彼の絵具の発色はとてもやわらかく、味わい深い。これは、岩谷の具を正しく使える事に加えて、「国宝 伴大納言絵巻」を模写したことにも起因しているだろう。彼の制作過程における心のよりどころとは、古きものへの憧憬と思われる。

論文「錆と劣化の形象化」は、第1章、幼少期を築地で育った事で、周辺に古びた建造物やトタン屋根・壁の錆に興味を持ち、色彩感覚が養われた。とされている。第2章では 出来上がった作品を洗ったり・鏝をかけたり意図的に破壊し、劣化したような歳月の重みを取り入れることによって、より深い作品に仕上げ、魅力的になるとしている。第3章では、直線で構成されている都市に住むことにより、その直線への自然な思い、モチーフの選び方などを紹介している。

博士に入って描いた作品は、主に線路・電線などの直線を基調とするものが多い。細い線では有るが、主役とし、直線を狙いに、絵画として感じさせる作品に仕上げている。線路の枕木を楽譜の様に仕上げ、やや抽象化することによって見る者に想像を掻き立てる。また、画面を痛めつけることによってできる偶然のワビ・サビの世界。岩絵の具を正しく使うことによる潤いのある画面、また岩絵の具の特性を活かした物の見方など、技法的にもある種完成されている。院展にも連続入選を果たし、中には賞候補にも選ばれた作品もある。

発表作品「線と軌道」は180cm×450cmの大画面を彼独自の色彩によって完成度の高い作品に仕上げている。直線である線路を主題に、写実絵画ながら錆等にインスピレーションを受け、抽象的な表現も取り入れた作品である。博士課程に入り線路を描いてきた集大成である。他の2点は、錆の基を意識して出来た作品で、抽象絵画ではあるが、表面的マチエールの面白さだけでなく、抵抗感があり深みのある世界観が感じられる作品に仕上げている。

今後は、直線と彼の中にあるワビ・サビに対する気持ちと、岩絵の具の錆色を武器に、より幅広く挑戦して欲しいという希望はあるが、作品と論文の整合性、高い次元で完成された作品群等、博士課程での勉強は十分に満たしている。よって審査員全員の協議の上、論文並びに研究作品は学位に相応しいと判断する。